



自然遊学館 だより



2006 SUMMER

No. 40



■2006.07.7 発行 貝塚市立自然遊学館

第 40 号を記念して……………1

■行事レポート

「館長と自然探訪」……………2

「春のハイキング」……………2

「千石荘の昆虫採集」……………3

「第 5 プールのヤゴ調べ」……………4

「二色浜 稚魚放流」……………6

■生きものよみもの

ホシアシブトハバチ……………6

【泉州生きもの歳時記】

リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ
……………8

■館長コーナー 夏 1……………8

■投稿

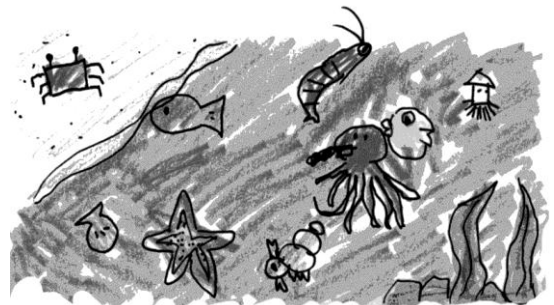
春木川河口の生きもの調査

岸和田市立光陽中学校 科学部……………10

■寄贈標本の紹介……………11

■遊学館スタッフ日誌……………12

■お知らせ……………13



木田安里紗さんの作品



第40号を記念して

「遊学館だより」が発刊40号を迎えました。第1号は1994年5月発行で、B4の紙1枚でした。自然遊学館が創立して半年後のことです。創刊が「春」となっていますので、当時から季刊を目途としていたのですが、完全に季刊となったのは、2002年の春号からです。12年が経過いたしました。

「石の上にも3年」と申します。冷たい石の上に3年座り続けると、石が温まってくるということから、努力はいつかは成就するという意味にたとえられています。自然遊学館の自然に対する様々な取り組みがなお、確かなものになることをスタッフ一同念願してやみません。また、そのことがこの小冊子に濃縮されているといっても過言ではありません。

身近な生き物の紹介、山や海岸・野原や川に出かけての行事活動、その報告、専門的な生き物の同定、近木っ子探検隊の活動、自然と取り組んだ子どもたちの発表、自然生態園の維持などボランティア活動、特別展の意図とその取り組み状況などです。すべてが今世紀の地球全体の課題であります。「環境」問題を解くキーワードと捉えることができます。自然の生き物を通して、人間と共に生きる環境を醸成することが求められています。人間が人間だけを優先し、文明を発展させたツケが今まさに目の前にぶら下がってきているのです。地球規模で環境を改善しなければ未来は保障されたものではありません。その問題に切り込みを入れていくのが自然遊学館の使命と自覚し、日々努力を重ねているのであります。

40号を人間の40歳に読み替えます。不惑です。第1号から第39号までをさっと読んでみますと40号に近づくにつれて、完成度の高いものになっているといいたいです。しかし、こと生き物、自然に関することはそのまま、いつまでも新鮮であります。号が若くても、その発見されたことや、言いたいことがそのときのものでありますから、迫力がありますし、あとから修正するものでもありません。要するに、「遊学館だより」の号を重ねるということは、読みやすくなり、記事に公正さや幅広さを持たせることがあっても、自然の成熟度を養うことには必ずしもつながりません。つまり、40号まで続けられたということが大切なのであります。そして、今後も号を重ねて、貝塚の自然環境保全に資したいと改めて決意致しました。

(館長 川村 甚吉)



自然遊学館だより 第1号～第39号

■行事レポート

館長と自然探訪

場所：自然遊学館多目的室

日時：2006年4月16日（日）13:30～16:00

参加者7名

本年度より、「館長と自然探訪」の行事を組み入れていただきました。そのひとつに「生き物・自然現象を切り絵にしよう」があります。4月16日（日）自然遊学館多目的室で実施しました。参加は7人でしたが刃物を使う活動だけにナーバスに対応しました。初めての人がすべてであったので、館長があらかじめ作ったサンプルで始めました。エビ、カニ、カメなどに取り組みその日のうちに完成させ、額に入れて、互いの出来を交換しました。



（川村 甚吉）

春のハイキング

場所：水間公園～馬場たわわ

日時：2006年4月22日（土）10:00～15:00

参加者42名

今年は、水間寺をぬけて水間公園の裏山道を通りました。タケノコ採りに失敗したらしいタケノコがあちこちに転がっていて、子どもたちの関心は「これ、持って帰ったら食べられるかな？」。

地味だけれど上品なカクミノスノキの花が咲き始めていました。

遍照寺の境内をぬけて旧街道沿いの木積の村に出ると、参加者は道路の片側ずつに分かれて、今年もツバメの巣数調査をしました（ツバメの巣：右側24、左側41）。

去年遊んだ休耕田で、スズメのテッポウを使った笛づくり、今年の笛名人は参加者の吉野京子さんです。最初はなかなか鳴りませんが、しばらくするとピーピーうるさいほどになりました。

「たわわ」に着くと、まずは野菜即売場でお買い物、帰りの道中の荷物の重さを気にしながらも、お米を買った人までいましたよ。

昼食後は、下見の時にたくさん見つかったゆり科の植物を探しに、みんなで川に沿って奥の方まで、出かけました。チゴユリ・アマドコロ・ホウチャクソウ・ササユリなど、組合の方たちが草刈りをしてくださるおかげ、あちこちでゆり科植物復活の兆しです。コナラの幹に越冬していたスズメバチを岩崎さんが見つけ、じっくり観察できました。この日目に付いた植物、観察できた生きものは以下のとおりです。

<植物>

きく科：ハハコグサ・コオニタビラコ・オニタビラコ・ノゲシ・ノアザミ・ヒメジョオン あかね科：ヤエムグラ おおばこ科：オオバコ ごまの

はぐさ科：オオイヌノフグリ・タチイヌノフグリ
しそ科：カキドオシ・ヒメオドリコソウ・キラン
ソウ むらさき科：キュウリグサ・ハナイバナ き
ょうちくとう科：テイカカヅラ せり科：ヤブニ
ンジン すみれ科：タチツボスミレ・ニオイタチ
ツボスミレ つばき科：チャ まめ科：カラスノ
エンドウ・シロツメクサ ばら科：オヘビイチゴ・
ヘビイチゴ・クサイチゴ あぶらな科：タネツケ
バナ きんぼうげ科：センニンソウ・ボタンヅル・
キツネノボタン・ウマノアシガタ なでしこ科：
オランダミナグサ・ノミノフスマ・ハコベ た
で科：イタドリ・スイバ ゆり科：ヤブカンゾウ・
ミヤマナルコユリ・ウバユリ・チゴユリ・ササユ
リ・アマドコロ・ホウチャクソウ さといも科：
ウラシマソウ かやつりぐさ科：ヒメカンスゲ
いね科：イヌムギ・スズメノテッポウ

<動物>

水間：カナヘビ

馬場：カワムツ、アマガエル、カナヘビ、アメリ
カザリガニ、スジエビ

<昆虫>

水間：ツマグロオオヨコバイ、ムネアカアワフキ、
ハグロケバエ、アカガネサルハムシ、ウメチョッ
キリ属の一種、ツマキチョウ

馬場：ヤブキリ幼虫、ヒメギス幼虫、ハラヒシバ
ッター、ツチイナゴ、オオカマキリ(卵囊)、ナガメ、
ヒメアメンボ(たわわの小池)、ナナホシテントウ、
ヒメカメノコテントウ、イタドリハムシ、キチョ
ウ、モンキチョウ、ツマキチョウ、ルリタテハ、
モンキキナミシヤク、ホタルトビケラ属の一種(幼
虫：たわわの小池)、シマハバチ属の一種、キイロ
スズメバチ(越冬女王)、キイロシリアゲアリ、ト
ビイロケアリ、クロオオアリ、クロヤマアリ、ア

メイロケアリ亜属の一種、キマダラハナバチ属の
一種

(白木 江都子・湯浅 幸子)

千石荘の昆虫採集

場所：千石荘

日時：2006年5月28日(日)10:20~15:00

参加者 39名

雨の心配もあったのですが、朝から快晴
で多くの方が参加してくれました。いつも
通り千石荘のバス停付近で集合して昆虫採
集開始となりました。集音機も用意して(鈴
子さんに託す)準備オッケー!

まず見つかったのはふ化してすぐのオオ
カマキリ。その他にはアワフキムシの幼虫
やナガサキアゲハが見られました。千石堀
城址の方に行くと虫こぶやカワラタケ類に
集まっていたアシグロオオキノコムシなど
でした。途中前半の列と離れるもすぐに追
いつき、池のほとりで樹液の出ている木を
見つけ、クワガタらしき虫を発見したそう
でしばらくの間穴をほじくっていましたが、
何と出てきたのはゴミムシダマシでした。
残念!

畑の脇で昼食を取った後、午前中の採集
品をみんなで発表し合いました。皆さん結
構取っていました。

午後は保養所へ向かい、途中でカブトム
シの幼虫やモンシロナガカメムシなどを見
つけました。ゴール地点手前で何とアライ
グマの子どもが溝に落ちて死んでいました。
外来生物の取り扱いにはいろいろ規則があ
るのですが、一応遊学館へ持って帰ること

になりました。ここでもナガサキアゲハやモンキアゲハなどが見られました。最後に今回の採集品を見せながら解説をし、講師の1人である澤田がこそと採集していたコクワガタをジャンケンで勝った2人に差し上げて終了しました。今は大阪市の市有地となってしまった千石荘。たくさんの昆虫がすむ場所として残しておきたいですね。



アケビコノハ幼虫

(ガの幼虫が何に擬態しているのでしょうか?)

最後に、今回確認された昆虫のリストを以下に示します。

確認された昆虫のリスト

<トンボ目>アオイトトンボ、コシアキトンボ、シオカラトンボ<バッタ目>ヤブキリ幼虫、ヒメギス幼虫、クビキリギス、アリツカオロギ、ツチイナゴ、ハラヒシバッタ<カマキリ目>オオカマキリ幼虫<ゴキブリ目>チャバネゴキブリ科幼虫<カメムシ目>クワキヨコバイ属、アワフキムシ科幼虫、クリオオアブラムシ、マルカメムシ、ツチカメムシ、オオホシカメムシ、ホシハラビロヘリカメムシ、モンシロナガカメムシ<コウチュウ目>アトワアオゴミムシ、セアカヒラタゴミムシ、クロツヤヒラタゴミムシ、クロコガネ、カブ

トムシ幼虫、コアオハナムグリ、コクワガタ、ナガタマムシ属、ヨツボシケシキスイ、アカハバビロオオキノコ、ナミテントウ、ナナホシテントウ、ジョウカイボン、ニセキベリコバネジョウカイ、オオクチキムシ、モモフトカミキリモドキ、キマダラカミキリ、ハイイロヤハズカミキリ、アカガネサルハムシ、クロウリハムシ、オジロアシナガゾウムシ、ハスジカツオゾウムシ<ハエ目>オオクロバエ、マガリケムシヒキ<チョウ目>ナミアゲハ、モンキアゲハ、ナガサキアゲハ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、ゴマダラチョウ、アケビコノハ幼虫、タケカレハ幼虫、キバラモクメキリガ幼虫<ハチ目>サトジガバチ、オオスズメバチ、セグロアシナガバチ、クマバチ、トビイロケアリ、ウメマツオオアリ、オオズアリ、ウロコアリ

(澤田 義弘)

第5プールのヤゴ調べ

場所：市営第5プール（二色）

日時：2006年6月3日（土）10:00～12:00

参加者 103名

貝塚市内の5箇所の市営プールにおいて羽化前のヤゴを救い出す行事は今年で6年目になりました。毎年、第1から第4プールは近くの小学校の生徒たちと一緒に、第5プールは自然遊学館の行事として行っています。

アカネ（アカトンボ）の仲間は、秋に親が卵を産み、卵で冬を越し、春に幼虫がかえります。でも、親は自分の子ども（ヤゴ）がプール清掃のために下水に流されてしまう

ことは予想できません。ウスバキトンボは春先に成虫が南方から飛来して卵を産みますが、アカネと同様に、ため池とプールを区別できません。

そういったヤゴを助けること、および実際に生きものに触れてもらうことが行事の第1の目的ですが、貝塚市内のどの場所に

どんな種類のヤゴがどれだけいたかを毎年記録することによって、貝塚市内の環境の変化を何がしか読み取ることが出来ればとも考えています。

(向井 康夫・岩崎 拓)

表. 貝塚市内の市営プールのヤゴ調査 (2006年)

数値はヤゴの個体数、○は採集されたことを示す。第5プールの幼児用では、ヤゴの個体数を数えなかった。

アカネ属に関しては、現地では種までの同定を行わず、一定数を無作為に取り出し、自然遊学館に持ち帰って顕微鏡下で同定し、一部の個体は成虫まで飼育して種を確認した。

6月1日の東小学校は、手違いにより第2プールの水を完全に抜いてしまったので、第1プールに変更した(5月29日に西小学校が行事を行った後ということになる)。

目	科	属・種	第1プール		第1プール		第3プール			第4プ
			大人用	幼児用	両方	幼児用	25m	50m	大人用	
			140	1	116	13	65	78	7	
			30分	10分	30分	10分	10分	30分	30分	
トンボ目	トンボ科	シオカラトンボ				14	26	53	3	
		アカネ属	803	37	720			11	20	
		アカネ属+ウスバキトンボ								
		ウスバキトンボ		17		1			1	
	ヤンマ科	ギンヤンマ								
	羽化殻		43				4	103	70	
カゲロウ目	コカゲロウ科	フタバカゲロウ属							○	
カメシ目	マツモムシ科	マツモムシ				○	○			
		コマツモムシ				○		○		
	ミズムシ科	コムズムシ属				○		○	○	
		オオミズムシ				○	○	○	○	
		チビミズムシ属		○	○	○	○	○	○	
	タイコウチ科	ミズカマキリ						○		
	アメンボ科	アメンボ				○	○	○		
		ヒメアメンボ	○	○	○	○			○	
		属不明								
ハエ目	ユスリカ科	属不明	○	○	○	○			○	
コウチュウ目	ガムシ科	ヒメガムシ				○				
		キヒロヒラタガムシ							○	
		ケベリヒラタガムシ							○	
	ゲンゴロウ科	ハイイロゲンゴロウ							○	
		チビゲンゴロウ							○	
		チャイロチビゲンゴロウ							○	
トビケラ目	ヒゲナガトビケラ科	アオヒゲナガトビケラ属				○				

5月29日: 第1プール(大人用)のアカネ属は、タイリクアカネとコノシメトンボ(個体数の比率33:4)。

5月29日: 第1プール(幼児用)のアカネ属は、タイリクアカネ2個体、コノシメトンボ35個体(実数)。

5月31日: 第4プール(大人用)のアカネ属は、タイリクアカネとコノシメトンボ(個体数の比率8:1)。

5月31日: 第4プール(幼児用)のアカネ属個体数を記録せず。

6月1日: 第1プール(大人用+幼児用)のアカネ属は、タイリクアカネ、コノシメトンボ、アキアカネ(個体数の比率は記録せず)。

6月2日: 第3プール(大人用)のアカネ属は、タイリクアカネ8個体と未確認3個体。

6月3日: 第5プール(大人用)のアカネ属は、タイリクアカネとコノシメトンボ(個体数の比率5:27)。

6月3日: 第5プール(幼児用)のアカネ属は、タイリクアカネとコノシメトンボ(個体数の比率3:27)。

二色浜 稚魚放流

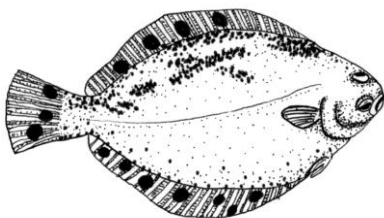
場所：二色浜海岸中央部

日時：2006年6月11日（日）14:00～15:30

参加者 150名

大阪湾に“幻の魚”ホシガレイの復活を願って、昨年に引き続き、その稚魚1千匹を放流するイベントを府立水産試験場の睦谷一馬さんを講師に迎えて行いました。実施場所が広い二色浜とあって、普段の観察会では考えられない大勢の方に参加してもらいました。水産試験場でふ化後140日間育てられた稚魚たちは、体長約10cm前後のサイズです。参加者は持参したバケツに稚魚を3匹程入れてもらい、波打ち際まで行き、「大きくなあれ！」と願いつつ、そっと放流していました。

ホシガレイは成魚の全長が50～60cmになり、背^{せびれ}と臀^{しりびれ}、尾^{おびれ}に星（黒い斑点）があるのが特徴です。ヒラメと並び称せられるほど味が良い貴重な魚で、大阪湾では昭和30年頃まで漁獲され、泉州地方では「ヘイジガレイ」と呼ばれていたそうです。それが沿岸の埋め立てによって稚魚の生育場所が減少した結果、個体数が激減し“幻の魚”になっていきました。これまで漁業者の方たちが中心となって大阪湾で放流をした稚魚は順調に成長し、大きなものでは全長40cm、体重1kg以上になっているとの情報があります。



稚魚を前に解説する水産試験場の睦谷さん

（山田 浩二）

■生きものよみもの

ホシアシブトハバチ

昨年の春、わくわくクラブの鈴子佐幸さんが、自然生態園「ドングリの森」のエノキ上で、レモン色の地色に黒い星をちりばめたオシャレな幼虫を2個体発見しました（2005年5月14日、貝塚市二色）。

エノキの葉にとまっている姿の一番の特徴は、体をカタツムリのように丸めていることで、しかもその巻き方には左と右の両方がありました（図1：図の左側の幼虫を「右巻き」、右側の幼虫を「左巻き」としました）。

このように体をらせん状に巻くものとしては、カタツムリやホラガイといった巻貝が思い浮かびますが、昆虫ではハバチ類の他に、前々号で青柳正人さんが報告してくれたカタツムリトビケラの幼虫がいます。



図1. ホシアシブトハバチ幼虫

5月20日までに、他に7個体の幼虫を採集し、エノキの生葉を与えて飼育し、左右それぞれの巻き方がどのように決まるのかを調べました。その結果、それぞれの幼虫が左巻き、右巻きを貫き通すことはほとんどなく、1日のうちで巻き方を変えることもあり、移動するときには体を伸ばした状態になることが分かりました(表)。

表. ホシアシブトハバチ幼虫の状態、および蛹化日と羽化日
幼虫の状態は、1日に2回、朝と晩に記録した。

	採集日		幼虫の状態		蛹化日		羽化日	
	2005年	5/14	右巻き	のび	左巻き	2005年	2006年	
個体1	5/14	4	1	0	5/18	4/25		
個体2	5/14	8	2	7	5/24	4/23		
個体3	5/16	2	2	10	5/23	-		
個体4	5/16	2	1	4	5/19	4/22		
個体5	5/16	7	1	2	5/21	4/28		
個体6	5/16	6	3	10	5/25	-		
個体7	5/16	5	4	6	5/23	4/28		
個体8	5/16	13	5	7	5/28	-		
個体9	5/20	4	0	1	5/22	-		

観察の結果から、「エノキの葉の食べる部分(葉の端)と自分の体の位置との関係で巻き方が決まっている」ものと推測されました。また、エノキの葉の裏表に関しては、野外では裏面(下面)にぶら下がっていますが、飼育容器内でぶら下がることができない状態では、どちらかを片寄って好むこ

とはないようでした。

この9個体は、5月18日から28日にかけて繭をつくって蛹になり、室温で適度に水をスプレーして飼育したところ、ほぼ1年が経過した今年(2006年)の4月22日から28日にかけて5個体が成虫になり(図2)、ハチ目コンボウハバチ科のホシアシブトハバチ *Agenocimbex jucunda* Mocsary であることが確認できました。



図2. ホシアシブトハバチ成虫

この飼育結果から、ホシアシブトハバチは1年のほとんどの時期を蛹として過ごし、春に成虫が繁殖して孵った幼虫が^{かえ}發育するという年1世代の生活史を送っているものと考えられます。ハバチの仲間は、餌植物の成長に合わせて、このような生活史を送るものが多く、幼虫を採集しても、なかなか成虫を得るまで時間が掛かるということがあります。

(岩崎 拓)

【泉州生きもの歳時記】

リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ 竜宮の乙姫の元結いの切りはずし

この長いタイトルを見て、何かの呪文？と思われる方もいるかと思いますが、これは海産種子植物であるアマモという海草（うみくさ）の別名です。浦島太郎の童話にも登場する竜宮城の乙姫さまの束ねて結った髪を切ったものという意味のネーミングは、波間に揺らめくアマモの長い葉の様子を言い表しています。このように日本の昔話と重ね合わせて命名されたロマンのある名をもつアマモは、内湾の浅瀬に群落をつくって生育し、アマモ場（藻場）と呼ばれ、昔から人々に親しまれてきました。アマモ場の中は、エビ類や貝類などさまざまな小動物がたくさん集まっており、魚の産卵場所や稚魚の生育場になっています。

しかし近年、港湾や工場の建設などのために沿岸の埋め立てが進んだことや、沿岸域の水質が汚れて透視度が低下し、日光が十分届かないことなどの悪条件が重なり、アマモ場は減り続けていました。大阪の海でもわずかに南部海域で自生地が確認されているようでしたが、久しく存続の危機がいわれています。

このような状況の中、今年の5月22日、二色浜で打ちあがったアマモの切れはしが館に持ち込まれました。どこで生えていたものだろう？と、疑問を抱えていたところ、10月になってダイバーの方が二色浜でアマモの自生地を発見しました。大阪の海でもアマモが復活してきたのではと、海浜植物



二色浜の水面に揺らめくアマモ

が専門の元館長、上久保文貴先生がこの春から阪南市の海岸をくまなく調査したところ、10箇所程で自生している群生地を見つけています。6月の調査に同行した際に見た阪南市貝掛の群生地は、見渡す限りのアマモが広がり、ここが現在の大阪湾であることを忘れてしまうくらいでした。

(山田 浩二)

■館長コーナー

夏1 タヌキを化かす

このコーナーも4回目を迎えました。秋1で始まりましたから、これですべてのシーズンを記すこととなります。それでは夏1にとりかかるとに致しましょう。

夏といえばスイカ、汗を流しながらガブガブ豪快に食べるのは圧巻です。そのスイカを自分の力だけで作って35年経過しました。改めて、スイカ暦35といたしますと、なんだか超ベテランの響きです。1年に1回しかできない作業ですから、35回してもすっかり忘れてしまっていることも多くあって、なかなかベテランにはなれませんが、なれませんが、自分で作ったスイカは

抜群にみずみずしくおいしいものです。ところが残念なことにこの10年間くらいはそんなおいしいスイカを食べたことがないので。

スイカを作っているのに食べられないとは一体どういうことなのでしょう。スイカアレルギーにでもなったのでしょうか。いいえ、食べたくても食べるスイカがないのです。ええっ！スイカを作っているのにスイカがない！って、一体どんなことなのでしょう。それはタヌキという動物がいて、全部私の代わりに食べてくれるのです。私の変わりに仕事をしてくれるのならいいのですが、1つも残してくれないのです。それでも私はめげずに1つすら採ることのできないスイカを創造しているのです。

始めの頃は打ちっぱなしのゴルフ練習場にあるようなネットで周りを囲み、天に当たる部分には防虫網を張り巡らせました。周りはタヌキ防止に天の方はカラス対策にと考えたのでした。成功したかに思いました。ところが、もう2、3日たてばおいしいスイカができるという時になって、食べられてしまったのです。それからは、判で押したように、もうすぐ食べられる頃、先取りされてしまうのです。

ゴルフ用のネットを噛み切るのは彼らにはたやすいことでした。たやすすくないのは人間である私の知恵です。昨年もやられてしまったのにまた同じようなことをしているのです。今回は周りをコンクリートの鉄筋にあたる格子になったパネルに金網を張りつけたものにしました。やっぱり、もう2、3日すれば食べられるという頃になって全滅です。さすが、金網は噛み切ることは

できませんが、天の部分に上ってそこから下に落ち、存分に食事を済ませ、金網をよじ登って、防虫網を破って脱出劇の終了となるのでした。

大がだめなら小はどうだろうと考えました。一辺が40cmくらいの立方体に金網を張ったものを実の上から被せ、4本の杭で止めるという工夫でした。これは下から土を掘り出して手をこじ入れて、晩餐会を開催した模様です。周りをよくすべるプラスチックにしたときなどは、1mもの高さを多分助走をつけてジャンプして問題をクリアしたようであります。とにかく、おいしい食べ物が目の前にあれば、どんな難関にもぶつかるその意欲は私たち人間が学ばなければなりません。飽食の時代といわれ、食べ物にさほど執着しなくなった人間はきっといつかはしっぺ返しにあうに違いありません。

10年間もタヌキにやられっぱなしの私は、タヌキに化かされているのでしょうか。古くから、ずるがしこい「タヌキ親父」、「タヌキ寝入り」などといわれるような生き物として登場してきます。また、愛嬌のある憎めない生き物としても描かれています。それは、より人間と親しい関係を表しているからなのでしょう。探求すれば、不思議なことが一杯出てきそうです。

(昨年、農具大手メーカーのK社「アニマル・ジャック」の使用で全く被害はなくなりました。バッテリーの電圧を上げて、その線に接すればショックを受けるシクミです。人間の方がタヌキを化かしたといえそうです。エッヘッヘ)

(川村 甚吉)

■投稿

春木川河口の生きもの調査

春木川の河口には干潮時に川底が露出する場所があります。そこで去る5月29日、自然遊学館の山田先生と共に、部員6名と顧問の先生で生き物の調査を行ないました。

当日は大潮で、岸壁や泥上に牡蠣がたくさん付着しているのが見られました。そこで、3時40分から約40分程度生き物の観察、採集を行いました。牡蠣の殻の陰にカニがたくさん隠れていました。ゴカイの仲間も多くいるようでしたので小さいスコップで穴を掘って採集しました。潮が少し溜まったところにはイソギンチャクがたくさんいました。モクズガニも2匹取りました。採集した生き物は学校の理科室へ持ち帰り、整理しました。

その結果、今回の調査では23種類の動物が採集、もしくは確認されたことが分かりました。

学校では山田先生に採集した生き物について、専門的なことをたくさん教えていただきました。マルウズラタマキビは少し珍しい貝だそうですが、春木川河口にはたくさん見られました。シマメノウフネガイとムラサキイガイは外国から入ってきた外来種の貝だそうです。他にも1つ1つの生き物について詳しく教えていただき、大変勉強になりました。

春木川は小さい川ですが、光陽中学校の校区を流れる身近にある川なので、これからもいろいろなことを調べていきたいと思っています。



潮のひいた春木川河口で生きものを探す

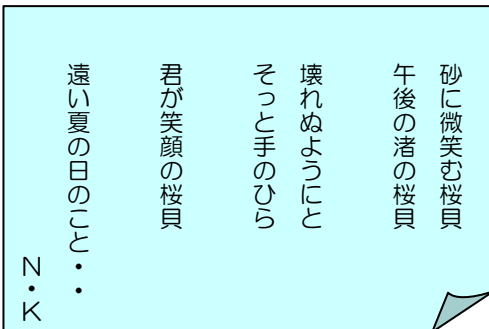


岸壁にびっしり付いたマガキ

「確認、採集された動物種」

刺胞動物門	花虫綱	タテジマイソギンチャク クロガネイソギンチャク
軟体動物門	腹足綱	イボニシ アラムシロガイ タマキビガイ マルウズラタマキビガイ シマメノウフネガイ
	二枚貝綱	アサリ サルボウガイ マガキ ムラサキイガイ
環形動物門	多毛綱	アシナガゴカイ スゴカイイソメ ミズヒキゴカイ カンザシゴカイのなかま
節足動物門	顎脚綱	タテジマフジツボ シロスジフジツボ
	軟甲綱	フナムシ ヨコエビの仲間 ユビナガホンヤドカリ モクズガニ ケフサイソガニ カクベンケイガニ

(岸和田市立光陽中学校 科学部)



■ 寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2006年6月分まで)

<哺乳類>

◆貝塚市職員より

アライグマ幼獣死体1点

貝塚市畠中 2006年6月3日

<鳥類>

◆鈴子達也さんより

アオサギ死体1点

貝塚市沢 2006年4月3日

◆文野春美さんより

キビタキ死体1点

貝塚市木積 2006年5月3日

<両生類>

◆木室仁太・田中貴大さんより

シュレーゲルアオガエル1点

貝塚市秋山川 2006年6月6日採集

<甲殻類>

◆和田直治さんより

モクズガニ♂1点

貝塚市名越 2006年3月31日採集

<昆虫>

◆木室仁太さんより

ナナホシテントウ成虫2点

貝塚市二色 2006年4月3日採集

◆高野晴一郎さんより

ウメチョッキリ属の一種成虫1点

貝塚市水間 2006年4月22日採集

◆坪井晴渡さんより

ホタルトビケラ属の一種幼虫2点

モンキキナミシヤク成虫1点

貝塚市馬場 2006 年 4 月 22 日採集

◆五藤武史さんより

リンゴコフキゾウムシ成虫 3 点

シロヘリナガカメムシ成虫 1 点

貝塚市柁谷寒谷橋 2006 年 4 月 25 日採集

マダラガガンボ成虫 1 点

貝塚市柁谷寒谷橋 2006 年 5 月 6 日採集

センチコガネ成虫 1 点

貝塚市柁谷トンネル東口付近

2006 年 5 月 12 日採集

◆Hsing Yu, Chou さんより

ヒナカマキリ成虫 2 点

1♂：台北（台湾）2006 年 4 月 8 日採集

1♀：宜蘭（台湾）2006 年 4 月 25 日採集

◆大森翔太さんより

ミズカマキリ成虫 1 点

貝塚市三ツ松 2006 年 6 月 2 日採集

◆文野春美さんより

マエモンシロスジアオシヤク成虫 1 点

貝塚市三ツ松 2006 年 6 月 26 日採集

<昆虫画像>

◆中島徹夫さんより

キイロスズメバチ越冬女王 2 点

貝塚市馬場 2006 年 4 月 22 日撮影

◆五藤武史

ヒメカマキリ♀成虫 1 点

岸和田市牛滝 2005 年 12 月撮影

<軟体動物>

◆鈴子佐幸さんより

ブドウガイ（死殻）ほか 6 点

近木川河口 2006 年 4 月 1 日採集

マテガイ（死殻）1 点

近木川河口 2006 年 6 月 2 日採集

■遊学館スタッフ日誌

5 月 30 日 大阪府立岬高校の海洋系コースの海岸生物実習に行ってきました。せんなん里海公園の人口磯で、ズボンやパンツまでも濡らしながら、生物の観察や採集を行いました。誰かしらマダコを捕まえると、さっそく 3 時のおやつになっていました。普段から潮風を感じ、海と近くに接している生徒達です。海の育む幸を享受しないてはありません。（浩）

6 月 1 日 毎年行っている市営プールのヤゴ救出ですが、東小学校の生徒と一緒に第 2 プールで行おうとした当日の朝、プールの水を少し残しておくはずだったが、手違いにより水が完全に抜かれてしまい、急遽、第 1 プールに変更してもらいました。東小の皆さん、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。（岩）

6 月 5 日 手話と字幕付きで放送する“目で聴くテレビ”の「自然と遊ぼう！」という番組で近木川河口でのカニ釣りの様子が取り上げられることになり、撮影が行われました。カメラのファインダー越しには、主役のカニよりヨシ原のゴミが目立ってしまい、まず撮影スタッフ全員でゴミ拾いをする破目になりました。河口に遊びに来ていた西小学校の生徒達が上手にカニ釣りをする出演者になってくれました。（浩）

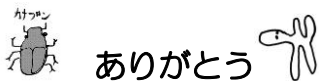
6 月 7 日 阪南市教育研究会理科部の研修を多目的室にて行いました。中学校の先生たちに我々が講義をするという企画です。

今回は“埋もれて暮らす生き物たち”というテーマのもと、浅海域の砂浜と森林の土壌の生きものを観察して頂きました。顕微鏡を使わないと見えないくらい小さな生き物たちに、さすがの先生方も四苦八苦しておられました。そんな様子を見ているうちに学校で生徒達に指導しておられる姿を一度拝見してみたくくなりました。(量)

6月14・15日 貝塚市立第1中学校の2年生5名が職業体験学習に来てくれました。展示している標本の作成や、飼育している生きものの世話、団体見学の小学生への説明などにチャレンジしました。初めての体験に全力投球した2日間、お疲れ様でした。

(一同)

7月3日 近木川の水生昆虫展の準備をしていて、東手川におけるゲンジボタルの記録がないことに気づく。勤務が終了してから現地に行き、標高325mの東手川橋で10数個体の発光を確認。標高415mの砂防ダム付近でも10数個体の発光を確認しました。当夜は霧雨でホタルの光も霞み、心が和むというよりは、何かもの悲しさを感じました。(岩)



毎回登場、鈴子さんのご家族(自然遊学館わくわくクラブ会員)には、自然生態園トンボの池のザリガニ採りで、またまたお世話になりました。ペットボトルを工作してモンドリを作り、5個ばかりつなげて餌を入れ池の底に沈めておいて、また引き上

げに来てくださいます。成果は、5/20:10匹、5/21匹:5匹、5/27:22匹、5/28:7匹でした。

喜多理恵さん(自然遊学館わくわくクラブ会員)は、子どもさんが小学校に行くようになって時間のゆとりができたこと、かんかん照りの下、自然生態園「海辺の植物ブロック」の帰化植物抜きに来てくださいます。このブロックは、自然海岸に比べ、波しぶきや潮風をあまり受けなため、放っておくと海浜植物よりも帰化植物畑になってしまうので、とても助かっています。(白)

■おしらせ

夏期特別展「近木川の水生昆虫」

場所：自然遊学館多目的室

期間：2006年7月29日～8月31日

自然遊学館が近木川の定期調査を始めてから10年目をむかえる今夏、近木川の水生昆虫の生活史、摂食、呼吸、人間との関わりなどを、標本・生体・写真・図表などを使って紹介したいと思います。

自然遊学館だより 2006 夏号 (No. 40)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2006.7.7

この小冊子は市内印刷で作成しています。